

もう一つの『去来抄』

——素丸『説叢大全』所収本の検討——

復本 一郎

一 はじめに

諸先学によって、精緻を究めて為されている感のある『去来抄』研究であるが、大きな死角があった。溝口素丸そまるの著作『説叢大全』に収められている『去来抄』が、それである。『説叢大全』は、板本で流布しており、また、昭和四年（一九二九）には活字化もされているので、比較的内容に披見し得る資料であるにもかかわらず、それが俳論書でなく、芭蕉発句の古注釈書であったためか、『去来抄』研究の資料としては、研究者によって一顧だにされなかつたのである。小稿は、『説叢大全』所収の『去来抄』に検討を加えることによって、その素性と、俳論史的意義を明らかにせんとするものである。

*

芭蕉の高弟向井去来によって著わされた芭蕉俳論の要諦の書『去来抄』は、最終的には、去来の没した宝永元年

(一七〇四)、死の直前に一書としてまとめられたと考えられている。無論、芭蕉生前からの書簡等の諸資料、あるいは、去来自身のメモランダム等が動員されているのではあるが、最終的に一書としての体裁を取ったのは、宝永元年ということであろう。時に、去来、五十四歳である。

その『去来抄』、それぞれの内容に即して、〈先師評〉〈同門評〉〈故実〉〈修行〉の四つのセクションより構成されている。これが板行、公刊されたのは、去来没後七十一年目の安永四年(一七七五)のことである。暁台訂正、呑溟校、暁台序、士朗跋、一音書、ということであるので、板行の中心人物は、蕪村と並んで中興俳諧の推進者の一人暁台であることが判る。この板本『去来抄』の意義は大きい。暁台とも交流のあった成美は、その著『随齋諧話』(文政二年刊)の中で左のごとく評価している。

去来抄三巻は、疑もなき去来が筆記にて、後世に益ある好書なり。往年、嵯峨の重厚、遊囊の中に秘蔵せしを、借受て全部写し取て、予が文庫にあり。世上に刊行せしは、安永年中、一音といふものに清書させて、尾張の暁台が板に刻みしなり。それより世にひろまりて、その賜をうくるもの多し。彼の板行のをりいかなる子細ありてや、古実の篇を除きて上木す。故に流布の本には故実の篇なし。されば此篇を加へて全備せしむべき事なり。

今日、去来自筆の『去来抄』が、大東急記念文庫に蔵されている。〈先師評〉と〈同門評〉の二つのセクションである。尾形仿氏の解説・釈文を付して、昭和三十二年(一九五七)に複製本が出版されている。夥しい書入れ、抹消、訂正等が施されており、旧蔵者の綱坊灰霜が「柿落舎の草稿」と言っているように、明らかに草稿本(下書き本)である。灰霜の前は、「若杉の何がし」が蔵していたという。灰霜所持となった段階では、四セクションが揃っていたようであるが、途中、〈故実〉〈修行〉の二セクションが散逸したということであろう。それゆえ、当然、こ

の草稿本に対する浄書本が想定され得るのである。

成美が語っている蝶夢門の重厚じゆうこう（去来の落柿舎を再興した人物）所持本の『去来抄』が、浄書本の『去来抄』だった可能性は、十分にある。そして、これに拠よったところの成美筆写本の『去来抄』も、伝存していたということなのである。

それはともかく、成美が記しているように、安永四年、『去来抄』が板行（成美が指摘しているように、〈故実〉のセクションを欠くが）されたことにより、「世にひろまりて、その賜たまをうくるもの多し」ということになり、『去来抄』が、多くの俳人たちに読まれ、彼等に影響を与えることになったのである。私は、この板本『去来抄』の底本となったものが、浄書本『去来抄』ではないか（ひよっとしたら重厚所持本の）と考える立場をとるものであるが（拙著『本質論としての近世俳論の研究』風間書房、昭和六十二年四月刊、参照）、今は、この問題には深入りしないことにする。

それでは、板本『去来抄』以前に、『去来抄』の具体的内容が公になったことはないかというに、あることはあるのである。

一つは、宝暦十二年（一七六二）刊の愚得坊鼠腹評ぐとくぼうそふくひよう、雪中庵蓼太頌せつちゆうあんりようたじゆの『俳諧無門関』なる俳論書である。収録四十八俳話中、二十九俳話が、『去来抄』の流用、または摘記である。その範囲は、『去来抄』の四セクションに及んでいる。ところが、それらの俳話が、『去来抄』を典故とするものであることは、一言も明示されていないのである。読者である俳人達は、それと知らずに、『去来抄』のエッセンスを享受していたのである。

もう一つは、安永二年（一七七三）刊、秋色、歎雷編の『花実集』。別名『柿晋問答』。江戸の其角まかくが、京落柿舎の去来を訪れての俳話を内容とするものであるが、多くの部分が『去来抄』の各セクションをアレンジして執筆さ

れており、その内容に、適宜、其角を絡ませている。去来の序を付して去来の著作の体裁を採^とっているが、其角系江戸俳人が偽作したものと考えられている。というわけで、この書もまた、『去来抄』のエッセンスを享受し得るわけであるが、読者である俳人たちは、『去来抄』とはかかわりのないところで、あくまでも『花実集』の中の一話一話として理解していたのである。

ところが、ここに、板本『去来抄』の刊行時点である安永四年（一七七五）以前に、『去来抄』からの引用であることを明記して、『去来抄』の一話、一話を引用した書物があったのである。それが、小稿冒頭に記した素丸の著作『説叢大全』である。

素丸は、正徳三年（一七一三）、江戸に生まれ、寛政七年（一七九五）に没している。享年八十三。もう一つの著作『俳諧教訓百首』（宝暦五年刊）の付録として付されている「去来先生確論」も、『去来抄』（〈故実〉〈修行〉）との関係で注目されている。葛飾派中興の祖。

『説叢大全』は、明和九年（一七七二）四月俊明序、明和八年（一七七二）五月桃翠序、明和六年（一七六九）六月（林鐘）素丸自跋、安永二年（一七七三）郷曆跋、安永二年三月敬林跋、ということであるので、素丸の稿が成ったのが明和六年、刊行されたのが安永二年と考えてよいであろう（矢島玄亮著『徳川時代^{出版者}集覧』萬葉堂書店、昭和五十一年八月刊においても安永二年刊として処理されている）。板本『去来抄』に先立つこと二年であるから、これは大いに注目されなければならないのである。

内容は、芭蕉発句の注釈書。先行する杉雨の『芭蕉翁発句評林』（宝暦八年刊）、蓼太の『芭蕉句解』（宝暦九年刊）、正月堂の『師走囊』（明和元年刊）の各注釈書に対する批判の書。「妥当で正鵠を得ている」と評価されている。素丸自身、巻頭に掲げた「凡例」において、

①とは、予が管見を記し、其外、古人の実記、或は、実録、古集などに散在せる句評どもを挙て證とし、又は、翁の真蹟によりて正すもあり。又、書名頭すもあり、なきもあり。多く出所たゞしきを要とす。(傍点筆者)
と記して、その説の客観性に意を配っていることを明らかにしている。また巻一冒頭の「総論」には「真の翁を腹身に納めなば、誰かそしり、誰か疑はん。此段は、翁の靈前に一華一香をさゝげて、一字一涙の論なりし。見ん人、それ推せよ」とも記している。かかる真摯な姿勢からの芭蕉発句の注釈であり、その過程における『去来抄』の引用、ということなのである。

二 『説叢大全』所収本『去来抄』の本文

そこで、『説叢大全』が掲出、引用している『去来抄』の本文を総て掲げてみることにする。その際、本文のみならず、その前後にある素丸の文章も、検討を加える際の参考資料として必要最少限度に掲げてみることにした。『去来抄』の本文、又はそれに準ずると思われる部分は、「」（鈎カッコ）で括って示すことにした。句読点、濁点、ルビ等は、私が付したものである。また、便宜的に通し番号を付した。全十話である。

①

年ぐくや猿にきせたるさるの面

去来抄二曰「此句いづれの所か歳旦と聞侍らんや、と。翁の曰、としぐくとはいかに聞しぞや。ハアツと申て退きぬ」云々。

②

ほうらいに聞ばや伊勢の初便り

去来抄に云「深川よりの文に、此句さまぐの評あり、汝いかゞ聞侍るや、と也。去来曰、都、古郷の便りともあらず伊勢と侍るは、元日の式の今様ならぬに神代を思ひ出て、便聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし奉るとこそ承り侍る、と申。翁曰、汝聞所たがはず、今日神祇のかうぐ敷あたりを思ひ出て、慈鎮和尚の詞にたより、初の一字を吟じ出し侍る也、となり」。又、端書に、「伊せにしる人おとづれて便うれしき、と慈鎮和尚のよみ侍る便の一字を出所にて、脚音の心にはたよらず、汝が聞清浄のうるはしく、神祇のかうぐ敷あたりを蓬萊に対して結びたる也、汝聞所珍重也」と云々。此説、秘蔵たりといへども、妄説まちぐにて、初輩の迷ひ多ければ記し出しぬ。翁の自注も同意なれば、是をもつて正證の句解とすべし。穴賢々々。

③

腫物にさはる柳のしなひ哉

去来抄曰「浪化集にさはる柳と出づ。是は予が誤伝る也。重て、史邦が小文庫に柳のさはると改出す。支考曰、さはる柳也、いかでか改め侍るや。去来曰、さはる柳とはいかに。考曰、柳のしなへは腫物にさはる、と比喻也。去来曰、然らず、柳の直にさはりたる也、さはる柳といへば両様に聞へ侍る故、重て予が誤を糺す。考曰、吾子の説は行過たり、只さはる柳と聞べし。文章曰、詞の続きはしらず、趣向は考がいへるごとくならん。去来曰、流石の両士、爰を聞給はざる口惜し、比喻にしては誰もく言はん、直にさはるとは、いかで及ばむ、格位も亦各別也。許六曰、先師の短冊に、さはる柳とあり、其上柳のさはるとは、首切レ也。去来曰、首切れの事は予が聞所に異

也。今論に不及、先師の文に柳のさはると慥也。許六曰、先師の跡よりなほされし句多し、真跡證となし難し、と也。三子、皆、さはる柳の説也、後賢、猶判じ給へ」以上。

④

八九間空に雨ふる柳かな

去来抄曰「素行曰、此句は其よそほひは知りぬ、落所たしかならず、と。西華坊曰、此句に物語あり。去来曰、我もあり。坊曰、吾先あり、木曾塚の旧草にありて、或人、此句を問曰、見難し、此柳は白壁の土蔵の間の松皮葺のそりより中枝うたれてさし出たるが、八九間も空にひろごりて、春雨の降るふらぬけしきあらんと申たれば、翁は、障子のあなたよりこなたを見おこして、さりや大仏のあたりにてかゝる柳を見置たると申されしが、続猿蓑に春の鳥の畠堀る声といふ脇にて、春雨の降るふらぬけしきとはまして定たる也。去来曰、我は、その秋の事なるべし、我が別墅におはして、此春、柳の句三つ有、いづれかましたらむ、とありしを、八九間の柳、さる風情はいづこにか侍りしか、と申たれば、そよ大仏のあたりならずや、げにと申、翁、そこなりとて笑ひ給へり。されば、俳諧を見る事、其人の胸中を草鞋はきて、二、三べんもかけ廻りたらんなどか見あやまり侍らん。名宗、高達の人といへども、能はよく、あしきはあしからむ。人を見て、其人に迷ふは尻馬に乗る人といふべし」云々。この説秘蔵たりといへども、妄注に初輩のまよはむ事を歎き、今、躡すものなり。知り置べきことにぞ。詩人の法など云売僧は、片腹いたき事也。

⑤

行春をあふみの人と惜みける

去来抄いはく曰「春もなほ昔なるが、先師湖南におはして、行春を近江の人と惜みける、と云句を、大津の尚白が評に、行春をあふみの人といはんも、行春を丹波の人といはんも、同じ事に侍れば、一句ふりたると覚えしと申き、去来、汝はいかに、と仰られしを、尚白が言よからず、近江の人と惜み給ふは、湖水朦朧たる折ふしの住家なればならし、暮春、もし丹波にをわさば、もとより此趣向、うかまじ、歳暮、又、近江におはさば、もとより此感こゝろなかるべし、風流はおのづから其場そのにあるものを、と申たれば、去来、汝は風雅を語るべきもの也なり、と感賞にあへりけるが、其場といふ事を知べき也なり」と云々。

⑥

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

去来抄いはく曰「古蔵集に、此句をあけて、先師のうへをなじりし也なり。是等これらは物の心をわきまへざる弁也なり。此句、追従に似たりと也、秋風は洛陽の富家にうまれ、市中をしり、山家に閑居して詩歌をたのしみ、騷人を愛すると聞て、渠かれにむかへられ、こゝに主を風騷隠居の人と思ひ給へる故、此作このあり。先師の心に佞諂なし、評者の心に佞偽あり。其そののち、しばく招けども行給はず。誠に欺くべし、知るべからず。又、句体の物ぐるしきは、其代そのの風也なり。子亥一巡の後評とは格別なるべし」と云々。

⑦

やまぢきて何やらゆかし葶草

去来抄いはいく曰「湖春云、すみれ草ハ山によまず、はせを翁、俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過也なりと。去来曰、山路にすみれをよみたる證歌多し、湖春は地下の歌道者也なり、いかでか、かくは難じられけむ、覚束なし」と云々。

⑧

升買うて分別かはる月見かな

去来抄いはいく曰「此句この、如何。去来曰、分別かはるといふ中の七文字見がたし、発句は殊更そのに其人の身にあて、見るべし、升と云物は所帯の道具なるに、此升買このて後は、鍋もほしく、桶もほしく、世の中の隠者、此筋このよりあやまるを鑑には申されし也なり」と云々。

⑨

雪の日に兎の皮の髭つくれ

去来抄いはいく曰「魯町曰、此句この、心、如何。去来曰、前書に子共とあそびて、とあれば、子どもの業と思はるべし、しるて理会すべからず、機（マキ）開を踏破て知べし、むかし先師、此句を語給ふに、予甚だ感動す、先師曰、是これを悦ばむもの汝と越人のみと思ひし、果してしかりとて殊更機嫌なりし。或人云、雪、越後兎の縁に出たり、去来曰、此説このの古事、神代の巻に似たり。或人云、兎の皮の髭作るは、雪中寒気を防ぐため也なりと、暑き日に猿若髭をはづしけり、と云句の格をもつて見る事、甚だあし」と云々。

⑩

鞍壺に小坊主乗るや大根引

去来抄いはく曰「蘭国云、此句いかなる所か面白き。去来いはく曰、吾子、今解し難からん、只図してしらるべし、譬へば、花を図するに奇山、幽谷、靈社、古寺、禁闕等によらば、其図よからん、能よきがゆへに古来多し、如此類は、図のあしきにはあらず、不珍なればとりはやさず、又、図となして形好ましからぬ物あらん、これらはもとより図あしきとて、用ひられず、希なる図あらば、是を画となしてもよからむ、句となしてもよからむ、されば、大根引の傍に草はむ馬の首うちさげたらん、鞍壺に小坊主のちよつこりと乗たる図あらば、古からんや、拙からんや、察せらるべし。蘭国が兄何某、却て蘭国より感驚す。かれは俳諧をしらずといへども、画を能よきするゆへ也。図師尚景が子也」と云々。

三 引用本文の正確さの問題

以上、『説叢大全』中の十話、今、便宜的に、昭和四年（一九二九）十二月十二日発行の大鳳閣書房刊の俳文学大系「註釈編第一」によって引用した。同テキストは、巖谷小波、伊藤松宇、橋本小舸によって校註がなされたものである。なお、岩瀬文庫架蔵河内屋太助板『説叢大全』（寛政十一年版）によって校合、本文を正した部分がある。最初に、引用資料がどれぐらいの正確さを有するものなのか、その検証を少しく行ってみることにする。素丸によつて、あまりにも恣意的にアレンジされて引用箇所が掲出されているとすれば、それはそれで考慮しなければならぬからである。当面の『去来抄』について言えば、素丸が準拠した底本が明らかでないので、まずは、『説叢大全』中、素丸が引用、掲出している資料で、板本として公刊されているものと、素丸の引用本文とを、二つのサンプルを抽出して比較検討する、という作業を行ってみたい。

まずは、①の〈年ぐや〉の条で素丸が援用している享保十五年（一七三〇）刊、支考編著の『俳諧古今抄』の一節である。

『俳諧古今抄』（支考）

此句は、五もじに迎年の意は籠ながら、掬たる歳旦の詞なければ、是をも雑の体とやいはむ。

『説叢大全』（素丸引用文）

此句は、五もじに迎年の意は籠ながら、掬たる歳旦の詞なければ、是をも雑の体とやいはむ。

素丸が、『説叢大全』を執筆するに当って、『俳諧古今抄』を座右に置いて、正確に引写していたことが窺えるであろう。右のサンプルに関する限り、素丸の恣意は、毫も入っていないのである。

もう一つサンプルを示してみる。⑤の〈行春を〉句の条で、素丸は、元禄八年（一六九五）刊、路通編著の『芭蕉翁行状記』を援用しているの、右と同様の試みをしてみることにする。

『芭蕉翁行状記』（路通）

文月十日も過て、しきりに父母のむかしもおもはるゝにや、殊に此秋は氣短に身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせむかたなき、などうち笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば、此かへるさにも粟津の庵に立より、しばらくやすらひ給。

『説叢大全』（素丸引用文）

文月十日も過て、しきりに父母の昔も思はるゝぞや、殊にこの秋は氣短に身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせん方なく、と打笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば、此かへりにも粟津の庵に立寄、しばらくやすらひたまふ。

漢字を仮名に直したり、仮名を漢字に直したりしている箇所、あるいは助詞の違いなどがあるもの（板本『芭蕉翁行状記』を披見しているものと仮定してのことであるが）、これまた、素丸は、引用テキストを、ほぼ正確に紹介しているといつてよいであろう。素丸自身が、『説叢大全』の「凡例」において「出所たゞしきを要とす」とまで記した矜持をかいま見ることができるのである。

私が、今、なぜ、このような作業を行っているかというに、素丸の『説叢大全』執筆の姿勢を確認しておきたかったからである。素丸は、芭蕉句に対する自説を述べる場合、その妥当性を期して、しばしば、信賴し得ると思われる資料を、生のまま、引用紹介しているが、それは、それぞれの資料を座右に置いて行われていたということなのである。決して、記憶に頼るといふような粗雑な方法は採られていなかったのである。

それ故、十話にわたる『去来抄』の引用紹介も、捏造などということとはさらさらなく、素丸所持本の『去来抄』によつて為なされていたということなのである。その、素丸所持、披見の『去来抄』が、善本か、疎略本かは、素丸の与かり知らぬところであったのである。素丸としては、何らかの径路によつて、世上に知られていない稀きこう観本『去来抄』（写本）を入手し得たのであろう。そのよろこびを「此説、秘蔵」②、「この説、秘蔵」④と語っている。そして、その『去来抄』を、信憑性のあるものと判断し、芭蕉句の解釈に大いに援用し得ることを認識、実行したということなのである。

ここで、試みに、素丸の引用紹介している『去来抄』十話の中のへやまじきて何やらゆかし董草⑦にかかわつての短い一話をサンプルとして抽出して、今日知られているところの自筆草稿本の『去来抄』、あるいは板本の『去来抄』と比較、検討するといった作業を行つてみたい。

『去来抄』（自筆草稿本）

湖春曰、董は山によまず、芭蕉翁俳諧に巧なりと云へども、歌学なきの過也。去来曰、山路に董をよみたる證歌多し、湖春は地下の歌道者也、いかでかくは難じられけん、おぼつかなし。

『去来抄』（板本）

湖春曰、董は山によまず、芭蕉俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過なり。去来曰、山路にすみれを詠たる證歌多し、湖春は地下の歌道者なり、いかで斯は難じられけん、いとおぼつかなし。

『説叢大全』引用『去来抄』

湖春云、すみれ草は山によまず、はせを翁俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過也、と。去来曰、山路にすみれをよみたる證歌多し、湖春は地下の歌道者也、いかでかくは難じられけむ、覚束なし。

この一話、自筆草稿本『去来抄』と、板本『去来抄』との間に、さしたる異同はない。素丸が所持、披見、引用したところの『去来抄』本文は、どちらかというところ、自筆草稿本系のものであるかな、と類推されるが、それはともかくとして、『去来抄』を紹介、引用するに際しても、その内容を恣意的にアレンジすることなく、素丸所持本『去来抄』を、正確を期して引写していただであろうことが、右のサンプルによつても、十分に窺知し得るであろう。

私達は、素丸が紹介、引用している『去来抄』十話が、素丸の篤実な姿勢から為なされていると判断しておいてよいように思われる。引写す時に、ひよつとして簡略化が行われる可能性はないことであろうが（右の三つのサンプルにおいては、そんなこともなかったが）、少なくとも、本文の恣意的な改竄かいざん、あるいは捏造ねつぞうなどということとは、考えられないのである。まずは、そのことを前提とする。

四 素丸所持本の不思議

素丸が所持していたと推定される『去来抄』（この場合、素丸が『去来抄』の一写本を何らかの径路で入手した場合と、知友の所持していた『去来抄』の写本を借用し、それを写し、転写本を作成した場合とが考えられるが）は、今日伝存している自筆草稿本『去来抄』や、板本『去来抄』と、内容的にいささか異なっていたと思われるのである。

なぜかというに、素丸が『去来抄』からとして紹介、引用している十話のうち、三話が、自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』には、見られないのである。その三話について検討を加えてみることにする。

① 年ぐや猿にさせたるさるの面

去来抄二曰「此句いづれの所か歳旦と聞侍らんや、と。翁の曰、としぐとはいかに聞しぞや。ハアツと申て退きぬ」云々。

まず、この一話からである。この話、自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』には、ない。

今日、このエピソードを収めるのは、去来の執筆、そして、元禄十二年（一六九九）成立の俳論書『旅寝論』である。板本としては、宝暦十一年（一七六一）に『去来湖東問答』の書名で公刊され、安永七年（一七七八）に『旅寝論』の書名で、再度公刊されている。

素丸が『説叢大全』をまとめたのは、先にも述べたように、その自跋よりして明和六年（一七六九）のことと考えられる。『去来湖東問答』は、板本として流布しており、容易に披見可能であるし、写本の『旅寝論』を披見する機会に恵まれたかもしれないことも十分に考えられるのである。

とすると、素丸は、『去来湖東問答』（『旅寝論』）を披見することによって知り得たエピソードを、『去来抄』の名

において紹介したということなのか。が、そんなことをする必要性は、素丸には皆無だったといつてよいであろう。素丸は、「出所たゞしきを要とす」る姿勢で『説叢大全』を執筆しており、「證歌、詩文、故事等のあやまれる、又字の書違へるなど正す」（凡例）といった厳密な態度を貫いているからである。「諸名家の説々をあつめぬれば、説叢にして、大に全しとは名付るなり」（凡例）と謳うたっている素丸にとって、出典をごまかし、糊塗する必要など、毛頭なかったのである。事実、『説叢大全』を繙ひもとくならば、先の『俳諧古今抄』『芭蕉翁行状記』をはじめとして、『片歌二夜問答』（涼袋著）、『素堂夜話聞書』（今日、伝本不明）、『宇陀法師』（許六著）、『笈日記』（支考著）、『桃の杖』（孟遠著）、『篋わくかせわ輪』（千梅著）、『東西夜話』（支考編）、『芭蕉庵小文庫』（史邦編）、『袖日記』（吏登著）、今日、伝本不明）、『蕉門』頭陀物語（涼袋著）、『枯尾花』（其角編）等、多くの書物が、明記、援用されているのである。まさしく「説叢」の名に恥じないのである。

ということとは、どういうことなのか。素丸が所持、披見していた『去来抄』（仮りに素丸本『去来抄』と呼んでおく。以下、時に、この呼称を用いることにする）には、正真正銘、①のエピソードが収められていたということなのである。

今、参考までに、『去来湖東問答』によって、該当箇所を掲げてみることにする。

一とせ、先師歳旦に、年々や猿に着せたる猿の面と侍るを、季いかゞ侍るべき、と伺ひけるに、年々はいかに、とのたまふ。いしくも承るものかな、と退ぬ。

この〈年々や〉にかかわつてのエピソード、許六の『俳諧問答』や、土芳の『三冊子』にも見られるが、内容を異にする。

対して、素丸が『去来抄』よりとして紹介、引用している①の本文と、右の『去来湖東問答』（写本類の本文も、

ほぼ同じ)の本文とは、構成、論旨の点で、全く一致する。そして、文章の細部にわたっては、大きく異なっている。素丸が、『去来湖答問答』(『旅寝論』)を披見して、それを『去来抄』よりとして紹介、引用したものでないことは、一読、明らかであろう。素丸が所持、披見していた『去来抄』には、確かに、この一文が入っていたということなのである。ニュースソースが去来であつてみれば、このエピソードが、『去来抄』に組み込まれていたとしても、少しも不思議はないのである。そんな『去来抄』が、間違いなく存在していたのである。

もう二つは、便宜的に、まとめて検討する。④⑧の二話である。なぜ二話をまとめて検討するかというに、この二話とも、自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』になく、かつ、元禄十二年(一六九九)刊の支考の著作『梟日記』の中に見えるからである。

この『梟日記』は、支考が元禄十一年の初夏から、秋にかけての西国行脚の記念の俳諧紀行日記であるが、この間、長崎での滞在が、先の『去来湖答問答』(『旅寝論』)執筆時の去来の長崎滞在期間と重なるのである。とすれば、これまた、ニュースソースは、支考でもあるが、去来でもあるということになり、『梟日記』中に支考が収録しているエピソードが、素丸所持、披見の『去来抄』の中に組み込まれていたとしても、おかしくもなんともないのである。

支考と去来が去来出生の地である肥前長崎で偶然、行き会ったのは、元禄十一年(一六九八)七月十一日。支考は「此日、洛の去来きたる。人々おどろく。この人は、父母の墓ありて、此秋の玉祭せむとおもへるなるべし」(『梟日記』)と記している。そして芭蕉の忌日である七月十二日に、支考と去来、卯七、素行等は、去来の実弟^{ぼねえ}牡年の亭に会して、俳談に花を咲かせている。支考は、その折の俳談を「牡年亭夜話」と題して『梟日記』に再現、収録している。去来も同席しているのであるから、その折のエピソードが『去来抄』に組み込まれる可能性は、十分

にあったのである。素丸が『去来抄』からとして紹介、引用している④の一文がそれである。少々長い文章なので、④の一文を再度引用することも、『梟日記』の該当箇所を引用することも省略する。④の「松皮葺」は、明らかに「檜皮葺」のミスであろう。その他は、漢字、仮名の違いが少しくあるものの、両者は、細部に至るまで、まったく一致する。もし『去来抄』にこの一文が入っていたとしたら、去来は、明らかに『梟日記』を流用した、ということであろう。いくら同席していたからといっても、そして、同じエピソードを綴るということであつたにしても、文章における細部の一致ということは考えられないからである。

——ここに至つて、素丸所持、披見の『去来抄』は、俄に、去来以外の第三者によつて恣意的に増補された『去来抄』ではなかつたか、という懸念が浮上してくるのである。

そこで、急いで自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』にはない、もう一つのエピソード⑧を見てみることにする。こちらのほうは短いので、双方、引用してみることにする。

『説叢大全』引用『去来抄』

此句、如何。去来曰、分別かはるといふ中の七文字見がたし、発句は殊更そのに其人の身にあてゝ見るべし、升と云物は所帯の道具なるに、此升買て後は、鍋もほしく、桶もほしく、世の中の隠者、此筋よりあやまるを鑑には申されし也。

『梟日記』

主曰、月見の句、又如何。予曰、分別かはるといふ中の七文字見がたし、発句は殊更その人の身にあてゝ見るべし、舛といふ物は所帯の道具なるに、此舛かふて後は、鍋もほしく、桶もほしく、世の中の隠者、此筋よりあやまる事を人の鏡には申されし也。

『梟日記』の記述は、元禄十一年六月十六日の項に記されているものである。「独有亭」での、芭蕉の真蹟を前にしての、独有と支考の対話の再現である。すなわち、「主」は独有であり、「予」は支考である。大内初夫氏著『近世九州俳壇史の研究』（九州大学出版会、昭和五十八年十二月刊）によれば、独有は、豊後（大分）日田の俳人。独有とも。蕉門の朱拙と交流があつた。今日の資料による限り、『梟日記』をこのエピソードの初出とせざるを得ない。とすると、『説叢大全』が引用するところの『去来抄』の記述は、支考の言を、去来の言に代替しただけのものであり、どう好意的に見ても、去来以外の第三者の手が加わつたものと思われ、その第三者によって去来のかかわつたエピソードとして捏造されたものであると結論せざるを得ないのである。これまた、先の④の本文同様、「予」（支考）と「去来」の代替箇所以外は、『梟日記』の本文と寸分変わらないこと、右に掲出した両者の引用本文に目を通す時、一目瞭然であろう。

以上、去来自筆草稿本『去来抄』、ならびに板本『去来抄』に見えない素丸本『去来抄』の三話に検討を加えたのであるが、①に関しては本来、原『去来抄』にあつたものか否か、速断が、なお保留されるものの、④⑧については、去来以外の第三者によって、『梟日記』の記述が編入されたと思ざるを得ないのである。特に⑧の『梟日記』の事実の改変によって、そのことが決定的となつた。たとえば、石河積翠の『芭蕉句選年考』（寛政年間成立）が、素丸の『説叢大全』の『去来抄』をそのまま引用、支持していようとも、である。しかし、素丸が所持、披見していた『去来抄』は、去来以外の第三者によって増補、改編されたものであつたと結論せざるを得ないのである。

五 素丸所持本『去来抄』の本文の吟味

そこで残る七つの本文の検討である。②③⑤⑥⑦⑨⑩である。このうち②⑤の二話が自筆草稿本『去来抄』、板本

『去来抄』中の〈先師評〉のセクションの中に見えるものであり、③⑥⑦⑨⑩の五話が〈同門評〉のセクション中に見えるものである。⑦に関しては、すでに検討を終っている。⑦に関する限り、素丸所持、披見の本文は、自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』の双方の本文に近いものであった（やや自筆草稿本『去来抄』に近いものであることも指摘しておいた）。残る②③⑤⑥⑨⑩は、どうであろうか。

②からであるが、この一文、自筆草稿本『去来抄』も、板本『去来抄』も、さしたる異同はない。その細部において、素丸本『去来抄』の本文は、⑦の本文同様、自筆草稿本『去来抄』に近いようである。そして、注目すべきは、

又、端書に、「伊せにしる人おとづれて使うれしき、と慈鎮和尚のよみ侍る便の一字を出所にて、脚音の心にはたよらず、汝が聞清浄のうるはしく、神祇のかうぐ敷あたりを蓬萊に対して結びたる也、汝聞所珍重也」と云々。

の部分である。板本『去来抄』は、この部分を、文末において、自筆草稿本『去来抄』の「初の一字を吟じ侍る斗なり、と也」との結びを巧みにアレンジして「初の一字を吟じ、清浄のうるはしきを蓬萊に対して結びたる也」とと改変し、本文に組み込んで処理しているので、欠く。この部分を有するのは、自筆草稿本の『去来抄』である。自筆草稿本『去来抄』は、この部分を、本文の行間に次のごとく記している。

いせに知人音信にて便りうれしき、と慈鎮和尚のよみ侍る便りの一字の出処にて、聊歌のこゝろにたよらず、汝が聞く清浄のうるはし、神祇のかうぐしきあたりを蓬萊に対して結したる迄也、汝が聞る所珍重也。

これによって、素丸本『去来抄』の不明箇所「脚音」が「聊歌（哥）」の誤写であることも明らかにするのであるが、それはともかく、素丸所持、披見の素丸本『去来抄』は、右の行間書入れ部分を「端書」として有していたと

いうことなのである。これで、素丸本『去来抄』が、自筆草稿本系の『去来抄』の写しであることが、確実となったのである。それに、前章で検討したときエピソード(①④⑧)が、書き加えられて挿入されていたということなのであろう。

③に関しては、自筆草稿本『去来抄』と板本『去来抄』との間に、ほとんど異同がない。故に、素丸本『去来抄』に対しても、特別に言及すべきことはない。

⑤は問題の多い一条である。自筆草稿本『去来抄』と、板本『去来抄』との間には、大きな異同は、ない。ところが、素丸本『去来抄』は、全く異なる本文なのである。②③⑦の検討によつて、素丸本『去来抄』の本文が、自筆草稿本の『去来抄』に近いことが判明しているので、ここでも、参考までに、自筆草稿本の該当の一条を掲げてみる(すなわち、板本『去来抄』も、ほぼ同一の本文であるということである)。

先師曰、尚白が難に、近江は丹波にも、行春は行歳にもふるべしといへり、汝いかゞ聞侍るや。去来曰、尚白が難あたらず、湖水朦朧として春をおしむに便有べし、殊に今日の上に侍る、と申。先師曰しかり、古人も此国に春を愛する事、おさく都におとらざる物を。去来曰、此一言心に徹す、行歳近江にゐ給はゞ、いかでか此感ましまさん、行春丹波にゐまさば、本より此情うかぶまじ、風光の人を感動せしむる事、真成哉、ト申。先師曰、去来、汝は共に風雅をかたるべきもの也、と殊更に悦給ひけり。(傍線筆者)

全体、大きく異なるのであるが、特に、素丸本『去来抄』が、右の自筆草稿本『去来抄』(板本『去来抄』も、概ね同じ)に私が付した傍線部を欠いていることによつて、全く別種の論旨の一条となつていのである。素丸本『去来抄』の論旨は、「風流はおのづから其場にあるものを」に尽きているのである。そして、全体として、少しの破綻もない。「春もなほ昔なるが、先師湖南におはして」の部分も、自筆草稿本『去来抄』、板本『去来抄』、二つながら

欠いている。すなわち、素丸所持、披見の『去来抄』は、どちらかというところ、自筆草稿本系の『去来抄』に近いのであるが、この⑤の本文のように、全く異質の本文を含み込んでみるのである。このような（素丸本『去来抄』のような）本文を有する去来による別種の『去来抄』があったのか、あるいは、自筆草稿本系『去来抄』を転写していく過程で、第三者によって⑤のごとくに改変されてしまったものなのか、その辺は、定かにし得ない。

⑥の一文に関しては、自筆草稿本『去来抄』と、板本『去来抄』とは、本文の差異、はなはだしい（板本『去来抄』は、それなりに整った本文となっている）。素丸本『去来抄』が、自筆草稿本『去来抄』に近い本文であることは、②③⑦の場合と同様である。しかも、この一文においては、自筆草稿本『去来抄』よりも整備された本文となっているのである（煩雑を避けて、自筆草稿本『去来抄』の本文を掲出することを省略するが）。⑤そして、この⑥の本文に目を通す時、自筆草稿本『去来抄』から、板本『去来抄』の底本となったと思われる浄書本『去来抄』が生まれる前の段階において、さらに、訂正、補訂等の為なされた『去来抄』の存在が、考えられなくもないのである。第三者が⑤あるいは⑥の本文を案出する意味は（その可能性も皆無ではないが）、あまりないように思われるからである。

⑨の本文も、板本『去来抄』よりも、自筆草稿本『去来抄』に近い。明らかな誤写と思われる部分（「機開」は「機関」であろう）があるが、この条も、⑤⑥同様、素丸本『去来抄』のほうが、自筆草稿本『去来抄』よりも整った体裁となっているように思われる。

ここで、素丸が所持、披見、そして紹介、引用している『去来抄』十話中の最後の⑩の本文である。この条は、自筆草稿本の『去来抄』も、板本『去来抄』も、さしたる相違はない。故に、素丸本『去来抄』も、どちらかといえれば自筆草稿本『去来抄』に近い、といった程度である。ただ、三者、一箇所だけ、それぞれに大きく異なる部分

があるのである。その箇所を摘記してみる。

自筆草稿本『去来抄』

今、珍らしく雅ナル図アラバ、此を画となしてもよからん、句となしてもよからん。

板本『去来抄』

今、珍しく本情の儘なる図あらば、是を画となしてもよからむ、句となしてもよからん。

『説叢大全』引用『去来抄』

希なる図あらば、是を画となしてもよからむ、句となしてもよからむ。

この部分に関する限り、三者三様なのである。そして、『説叢大全』が引用するところの素丸本『去来抄』が、全く独自の本文であるかという点、そうではないのである。宮本三郎氏校注の『校本芭蕉全集 第七卷 俳論篇』（角川書店、昭和四十一年七月刊）を繙ひもとくならば、素丸本『去来抄』と同様の本文を有する『去来抄』は、国立国会図書館本『去来抄』、天理図書館卷子本『去来抄』、『去来集 蕉門秘決集』（大磯義雄氏蔵本）であることが明らかとなる。これら三本は、大東急記念文庫蔵の自筆草稿本『去来抄』に近い本文を有しながら（それ故、今日、『去来抄』を翻字するに際して、大東急記念文庫蔵自筆草稿本『去来抄』が欠く〈故実〉〈修行〉の二セクションは、国立国会図書館本『去来抄』を底本としている）、時に、独自の本文を有しているものである。

ということ、素丸所持、披見の『去来抄』が、去来の自筆草稿本系の『去来抄』よりの転写本であることは、間違いないが、本文的には、以上に検討を加えてきたごとく、かなり複雑な様相を呈しているのである。そして、その様な、もう一つの『去来抄』が、たしかに存在していたのである。

六 素丸所持本『去来抄』の意味

『去来抄』が板本として公刊されたのは、安永四年（一七七五）のことであった。成美が『随斎諧話』で「それより世にひろまりて、その賜をうくるもの多し」と述べているように、それ以降、『去来抄』の披見が容易となり、多くの俳人達（読者）が、その恩恵に浴することになったのである。

『去来抄』の存在それ自体は、例えば、稿本ではあるものの、明和四年（一七六七）成立の梨一の著作『もとの清水』中の「参考書目」中の一冊として掲げられているごとく、一部の人々には知られていたであろう。

その『去来抄』を、書名（呼称）のみならず、板本『去来抄』公刊以前に、逸速く、ほんの一部分ではあるが、公にして、人々に供したのが、安永二年（一七七三）刊の素丸著『説叢大全』であったということなのである。多くの人々は、この『説叢大全』によって、はじめて『去来抄』の存在を知ったことであろうし、ほんの一部分ではあるが、その内容にも接することができたのである。素丸のこの行為は、素丸がたまたま『去来抄』を入手得たということによるが、俳論史的に見て、決して看過し得ない、意義深いことなのである。

素丸が所持、披見していたところの『去来抄』の本文は、今日見ることのできた十話を通してからだけでも、全体的に謎の多い、興味深い本文であったであろうことが窺知し得るのである。

（平成七年五月五日了）

〔付記〕 岩瀬文庫本『説叢大全』を披見するに当って、俳誌「若竹」主宰加古宗也氏に写真版の御配慮をいただきました。記して、深謝申し上げます。